

聖書：エペソ 4：3～6

説教題：教会の唯一性

日時：2014年2月2日

教会について聖書から学ぶ視点には色々考えられます。たとえば見える教会と見えない教会、戦闘の教会と勝利の教会、宗教改革時に議論された教会の標識に着目すること。そして今一つ代表的な方法は教会の属性を見て行くことです。使徒信条に「聖なる公同の教会」と出て来ます。この信条の原型は2世紀の古ローマ信条に遡りますが、第1ニカイア公会議（325年）で採択された信条には「公同なる、使徒的な教会」という表現が出て来ます。そして381年のニカイア・コンスタンティノポリス信条には「唯一の、聖なる、公同の、使徒的な教会」と出て来ます。この4つの形容詞の中の一つ目、教会はただ一つであること、その唯一性について取り上げてみたいと思い、エペソ書4章の御言葉を開かせていただきました。

このエペソ書のテーマ聖句は1章10節。「時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方にあって、一つに集められるのです。」今、私たちが住んでいる世界には至る所に分裂や争い、不一致があります。それは国と国との間ばかりではなく、個々人の生活においてもそうです。そのために私たちは苦しみ、うめいています。聖書はこのことの根本に私たちの「罪」があると語っています。神が最初に世界を造られた時には「見よ、それは非常に良かった」と言われるほどに、素晴らしい調和と一致がありましたが、罪の結果、神と人間、人間と人間、人間と世界の関係に断絶が生じました。なお神のあわれみによって究極的な混乱状態には至っていないとは言え、世界のあらゆる所には不調和があり、不協和音があります。もしたくさんの楽器がばらばらに思いのまま弾いたり、吹き鳴らしている部屋にいたらどうでしょうか。私たちは耐えられなくなり、早く外に出たいと思うでしょう。ある意味でそういう世界に私たちは住んでいます。

しかし神はそんな世界をキリストにあって一つに集めてくださるといふ御心がここに示されています。すなわちキリストにあって私たちの罪の問題を解決し、失われている一致と平和を取り戻してくださる。この一致は決して単調で画一的な一致ではなく、一人一人の個性や種々の賜物が生かされる一致です。そしてこのエペソ書が語るチャレンジは、この一致と平和の祝福はまず教会において現れ始めていなければならないということです。宇宙のどこよりも先に、教会でそれが始まっていなければならない。神はそのことを永遠の昔から計画し、教会を通してご自身の栄光を現わそうとしておられる。その御心をわきまえ知って、その御心に生き抜くようにとパウロは語っているのです。

まず注目したいことは3節に「御霊の一致を熱心に保ちなさい」と言われていることです。「保ちなさい」ということは、すでに一致は与えられているということです。その一致は「御霊の一致」と言われているように、聖霊が作り出してくださった一致です。私たちは信仰を告白してこの交わりに入ると、信仰を持っている人たちと強い絆で結ばれている自分を発見します。初めて会ったクリスチャンなのに、その人との間にはすでに深い心の一致があり、もう何年も前から友達であったような気がするということがあります。それは御霊による一致があるということです。

この一致はどういう一致であるかが4～6節に記されます。ここを読んで目に留まることは「一つ」という言葉が繰り返し出て来ることでしょう。またもう一つ私たちの注目を引くことは、父、子、聖霊の三位一体が出て来ることです。4節では聖霊が、5節では主なるキリスト

が、6節では父なる神が出てきます。ここから私たちの一致は三位一体の神に基礎づけられていることが分かります。

順番に見て行きますが、まず4節に「からだは一つ、御霊は一つです。」とあります。「からだ」とはここではキリストのからだなる教会のことを指しています。私たちはキリストのからだの色々な部分を構成していると言われていました。目、手、足、耳、口、その他、たくさんの部分があります。それらの器官はただ機械的に寄せ集められただけではなく、全体として一つに連動し、機能しています。教会もそうです。なぜなら一つの御霊が私たちの内に住んでおられるからです。私たちは顔も性格も生まれた背景も賜物も違いますが、御霊が一つであるがゆえに、一つのものとして扱われているのです。

また御霊の働きに関係することとしても一つ、「召しのもたらした望みも一つ」とあります。この「召し」とは神による救いへの召しのことです。私たちは自分を見る時、弱く頼りないのに、必ず最後の救いに至るまで導いていただけるという望みを抱いて喜んでいただけるのはなぜでしょう。それは聖霊がその確信を与えてくださっているからです。1章14節：「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。」クリスチャンは将来に対する非常な希望を持っています。この世で「死」の現実と直面し、悲しむことがあっても、それを乗り越える喜びを歌うことをやめません。将来、共に一つ天国に住むことを確信して、喜びに満ちて天国についての讃美歌を歌うのです。来たるべき命、輝かしい御国の幸いを一つ心になって歌うのです。これは御霊が私たちの内に共にもたらしてくださっている祝福です。

5節：「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。」御霊は私たちに罪を示し、キリストによらなければ救いはないことを示し、キリストの素晴らしさに目を開かせ、キリストにより頼むように私たちを導きます。そうして結ばれるところの主キリストはただお一人です。従ってこのお方を信じる信仰も一つしかありません。私たちが主について信じていることは、この方が私たちの罪のために十字架上で死んでくださったこと、三日目によみがえられたこと、そうして私たちの救いに必要なことをすべてしてくださったということです。私たちはこの方により頼むだけで救われ、永遠の命に生かされることができる。教会の中には様々な教派があり、細かな点でその強調するところが違いはありますが、主により頼む信仰は一つであるはずで

す。また「バプテスマは一つ」ともあります。洗礼の様式にはいくつかの種類がありますが、ここではバプテスマが意味する中身のことを指しています。バプテスマが現わしていることはキリストとの結合です。ガラテヤ書3章27節：「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」主がお一人である以上、その方につくバプテスマも一つしかありません。私たちは同じ主に結ばれ、同じ主の恵みに生かされて歩んでいるという意味で、同じ一つのバプテスマにあずかっている者たちです。

6節には「すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」とあります。キリスト教の深さは、ただキリストを知ることにとどまらず、さらに父なる神を知ることにも進んで行くことにあります。私たちは私たちのために尊い命を投げ出してくださいましたキリストを心からの感謝をもって礼拝しますが、その時に同時に知ることは、この尊い一人子を私たちに与えて下さった父なる神がおられるということです。この父なる神についてパウロはまず「すべてのものの上にある方」と言っています。すなわちこの方は超越者であり、一切の事柄の上に絶対的主権を持っておられる方。と同時に「すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる」ともあります。すなわち神

は超越しているからと言って、私たちから遠く離れて関わりを持たない方ではなく、むしろこの世界のあらゆる事柄を導き、私たちのすぐそばにおられる方である。この方が絶対主権をもって、私たちの髪の毛一本に関わることまでご支配くださっているのです。私たちはただならぬ慰めを受けるのです。そしてパウロが言っていることは、その父なる神は一つということです。ただ一人の父なる神が、ただ一人の救い主を与え、ただ一人の御霊によって私たちをこの方に結び付けてくださっている。だから教会は一つでしかあり得ない。私たちはこの三位一体の神の一体性に基づく一つの交わり、一致の祝福に生かされている者たちなのです。

私たちはこのことを知って感謝すると共に、必ずしもそうでない現実もまたあることを思います。この世の教会の中には、なお不一致があり、仲違いがあり、不調和が見られます。それはやはり一言で言って、私たちの罪ゆえです。私たちは主の十字架によって罪を赦された者でありつつも、私たちの内にはまだ罪が残っています。地上にある限り、私たちが完全に聖められた状態に達することはありません。そういう意味で最後の日までは戦いがあります。しかしだからと言って私たちは、教会は一致できなくても良いのだ、分裂があっても良いのだ、とそれを肯定し、そこに居座ってはなりません。「我は唯一の、聖なる、公同の、使徒的教会を信じる」と私たちは告白します。神を信じることと教会を信じることは違いますが、私たちは教会がそのようなものとして存在していることを信じますと告白しています。とするなら、教会が益々そのようなものとして現れるために、私たちが祈り、努力し、取り組むのは当然のことでしょう。この教会設立記念日に聖書から教会について学ぶ意義もそこにあるでしょう。聖書が示す教会を改めて知り、それに照らして自らを省みて、益々そのようなものであるように、その本質が現れ出るようにと取り組むのは私たちの義務です。

最後に簡単に二つのことに触れて終わりたいと思います。その一つは、この私たちの取り組みのために2〜3節の勧めがあるということです。2節：「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い」。私たちがこれと反対のことをしたら、教会の一致を保つどころか破壊してしまいます。謙遜の反対に傲慢で、柔和の反対に荒々しくて、寛容の反対に怒りっぽくて、忍び合うことの反対にイライラするなら、神が与えてくださっている一致をメチャクチャにしてしまいます。だからそうならないように！とパウロは言っているのです。今、2節の言葉を一つ一つじっくり見る時間はありませんが、是非これらの言葉をゆっくり自分に当てはめて考えたいと思います。へりくだった心で人をすぐれた者と思うこと。優しい心で礼儀正しく行動すること。また「寛容」という言葉は「長く苦しむ」という言葉ですが、すぐカッとせず、むしろ長く自制し、怒るのに遅くあること。また「忍び合う」とは一緒に生活しにくい人、イライラするような人に応戦せず、忍耐し、愛をもって仕えることです。そして3節に「御霊の一致を熱心に保ちなさい」とありました。パウロは「熱心に」と言っています。またこれは現在形ですから、常に継続して取り組みなさいということです。私たちはこのみことばにどれくらい忠実であるのでしょうか。

またもう一つのことは、これは一つの地区教会を越える課題でもあるということです。教会が一つであるなら、どうしてこんなに多くの教派・教会があるのでしょうか。もちろん私たちはただ外的に、組織的に一つになれば良いものではありません。真理を犠牲にして形だけ一つの教会を作ったところで、その一致には何の意味もありません。御霊の一致は何よりも内的な一致であり、霊的な一致です。しかしだからと言ってそれぞれが自己主張し、たくさんの教派・教会に別れている現状をただ肯定するのも正しくないでしょう。御言葉が示す通り、教会は唯一であること、三位一体の神に基づく一つのものであることが見える形で現れるように、様々

な働きにおいて協力・協働することを求めて行くべきでしょう。そして聖書の教えについての確信を妥協させることなく合併できる教派とは合併することも求めるべきでしょう。そういう意味で 20 年前に日本基督長老教会と日本福音長老教会が合同して日本長老教会となったことは非常に大きな意義のあることです。先日、20 周年記念誌も発行されましたが、最近よく聞く話は、最初は合併してどうなるかと思ったが、中会も再編成されて本当に一つ教会であることが違和感なくなってきたということです。本当に感謝です。益々このように教会の見える一致を求めることは聖書が私たちに命じていることでしょう。

教会は唯一であること、私たちは一人の神・一人の主・一人の聖霊に連なる一つの教会に導かれていることを覚えて感謝したいと思います。この御霊の一致が、私たちの経験する教会において見える形で現れ出ることを私たちが熱心に求めることができますように。イエス様はこの教会の一致のために十字架前夜に祈ってくださいました。その一節を先の招詞で読んでいただきました。そしてさらにこれから後に加えられる人々のためにもヨハネの福音書 17 章 20 節で祈ってくださいました。「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。」御霊の一致を感謝し、福音宣教を通してさらに人々がこの祝福に加えられることを求め、キリストにあって一つに集められる恵みを喜び歌い、一切の栄光を神に帰す教会の幸いと光栄に歩みたいと思います。